

樹木に現れたキリストの顛末：アンデス世界の民衆カトリシズム

加藤隆浩

キーワード： 民衆カトリシズム、クスコ、イエスキリスト、ペルー

Details of Appearance of Jesus in the Andean World

Takahiro KATO

Keywords: Popular Catholicism, Cusco, Christ, Peru

カトリック世界ではしばしば岩窟や樹木などにキリスト・マリア・聖人が「出現」する。ペルー南部も例外ではなく、コイヨルリティ、ワンカなどはその発現の場がのちに世界的な巡礼地になったし、トレチャヨックの主やモリエチャヨックの主などは地域の守護神として根強い信仰を獲得している。

では、姿を現したこれらの「聖なるもの」は、その後どのような道筋を経て信仰体系を確立したのか、あるいは消滅の憂き目を辿ったのか、その変遷のプロセスをいったいどのように理解したらよいか問題となる。

ペルー南部では聖なるものの出現という現象が比較的頻繁に生起しているが、従来の研究の動向は、コイヨルリティ、ワンカ、コパカーナ等の著名な事例ばかりに視線が注がれ、世界的な巡礼地にはなりえなかった聖なるもの、短命に終わった聖なるものの出現についての解析は、残念ながらいまだ極めて限定的というしかない。しかも、先述のこれまでに研究が蓄積されてきた聖なるもの—たとえばコイヨルリティーは、植民地時代かそれに近い時代の現象であり、研究が依拠する文書は教会の内部文書として存在するが、それだけでは具体的な信者の動きや考え、思考が見えにくい。ましてや信者の側に立ち、信者の主張や信仰の成立過程を見ようとする、教会側からの文書からだけでは生き生きとした描写を望むべくもない。

しかし、扱う対象が近年のものあるいは割合に新しい事例なら、それは比較的容易に検証できる。なぜなら、近年の事例であれば、聖なるものの出現、変貌、そのプロセスの渦中に入った人

がおり、問題の宗教現象を直接見聞してはいなくても、祖父母、親、友人らからその体験談を繰り返して聞く機会を持った人がいる場合も少なくないからである。

そこで本発表では、ペルー共和国南部クスコ市ならびにその周辺で比較的最近発生し、その発生時から今日までの経緯を語るインフォーマントの証言をもとに4つの事例—A セニョール・デ・ウインピリヤイ（以下、SW）、B キリスト・デ・イスクチャカ（以下、CI）、C セニョール・デ・チェクタカカ（以下、SC）、D セニョール・デ・ホチュウルホ（以下、SJ）—を取りあげる。本発表で取り上げる資料は1990年以降発表者が現地調査を行い収集したものである。

現地調査で得た4つの資料を比較すると、どれも一様にイエスキリストの奇跡的出現として民衆の爆発的熱狂が見られる。しかし、AからDまで、つまりSW、CI、SC、SJへの熱狂ぶりも日を追うごとに変化する。たとえばSWにはSW友の会が組織されクスコの司教に直接面談しカトリック教会の公認を求めるまでに先鋭化した。今ではSW駅のバスターミナルのとなり、礼拝堂を構え、クルスベラクイには多くの参拝者が詰めかける。複数のカルゴ集団が機能しており、ダンスチームも出てきている。SCは1986年のクスコ地震でできた大きな岩の裂け目に老婆がイエス出現の啓示からその絵姿を発見したことを発端に、爆発的な参拝現象が始まった。日に日に信者が増大し、献金を集めて出現の場を聖地とし、そこに宿泊施設を整備し一大巡礼地にしようという計画案作成まで話は膨らんだ。しかし献金の不正流用が発覚したのを契機に参

拝の熱気は一挙に冷えた。現在は、洞穴近くの崖の中腹にかけられた大きなカルバリオになり、熱狂的な信仰を集めている。

CI の場合は、盗まれたイエスキリストの絵画とまったく同じ顔のイエスがカプリの木に現れ、そこにブリキ製のイエスの顔をはめ込んだものがご神体となっている。これは信徒の前に姿を見せた神の姿を写し、聖なる出現の記憶を永続化するとともにそれを拡大・普及しようとするものであった。しかし今は畑の脇にキリストの顔をつけたカプリの木が一本だけ立っている。地元住民の認知度は低い。ただし、かつては熱狂的な信仰を受けていたし、様々な逸話も知られている。SJ は 2001 年に一人の農民宅の庭に茂るユーカリの木に現れた。イエスの到来で生成されつつある聖なる環境が壊れてしまうのを恐れ、はじめは一般公開するのを渋った。それで新たに誕生したイエスをブルーシートで覆うなどし、興味本位、冷やかashiでやってくる人々、マスコミ、プロテスタント系セクトとの対面をコントロールした。したがって出現当初は、他の事例にあるような宗教的熱狂は感じられないが、蝋燭による占い・託宣と泥による霊的浄化により信者を拡大中。

さて、以上のように見てくると、ここで取りあげる 4 つの事例は、カトリック化が完了し教化が安定したほぼほぼ同時代に、同じ地域で、同じようなキリストが出現しているのに、その結末—まだ最終形ではないが—は互いに大きく異なる。この差をどのように説明すればよいのか。本発表は、4 つのキリスト出現の事例の提示と、事例から導き出せる問題点の指摘にとどめる。

【主要参照文献】

Kato, Takahiro, 1992, Auge y vigor de la fiesta de las cruces. En *El Qosqo: Antropología de la ciudad*, editado por H. Tomoeda y Jorge Flores Ochoa, pp.249-276, Centro de Estudios Andinos Cuzco, Cuzco.

Paz Flores, M. Percy, 1992, El Señor de Teteqaqa se da buen trato. En *El Qosqo: Antropología de la ciudad*, editado por H. Tomoeda y Jorge Flores

Ochoa, pp.225-248, Centro de Estudios Andinos Cuzco, Cuzco.